

グローバルシティズンシップを育む社会科授業の開発

ーロールプレイの活用によって価値判断する地方自治の学習を通じてー

迫 眞也 ・ 小原友行* ・ 草原和博*

要約：グローバルシティズンシップの育成には、世界的課題に向き合う市民性と、身近な地域における課題に向き合う市民性が必要である。その際、グローバルとローカルの乖離が大きな課題となる。両者をつなぎ、グローバルシティズンシップを育てるため、コミュニケーションツールとして概念を探究する学習が寄与すると考えた。そこで、概念についての価値判断を行うことによって、価値観を再構成する授業開発を行った。地方自治の単元で仮定の村落をめぐる地方創生について、ロールプレイを活用し、異なる価値観をすりあわせる形の協議を行わせた。ワークシートに書かれた生徒の記述から、おおむね地方自治を構成する概念を見いだせたことがわかった。

キーワード：グローバルシティズンシップ教育、ロールプレイ、価値判断、地方創生

I. はじめに

社会科の目標のひとつに、公民的資質の育成がある。近年のグローバル化によって、この公民的資質はその範囲をいっそう拡大したといえよう。これは、グローバルな問題にいかに向き合うかという国際社会に生きる国際人としての公民的資質、すなわち、グローバルシティズンシップを育てる必要性が生まれたということである。ペニー・エンスリン(2014)はグローバルシティズンシップ教育の実現を「野心的な目標」と表現し、その「野心のひとつ」として「未来の地球市民が複雑で相反する価値観や目標を理解し、折り合いをつけること」を挙げている。現在、このグローバル社会に生きる生徒たちに求められているのは、国籍や民族、宗教などといった差異や、これをもととする価値観を乗り越え、国際人たろうとする市民性だといってもよいだろう。一方、平成27年6月の公職選挙法の改正によって、有権者年齢が18才以上に引き下げられた。現在の中学生は、3年後には有権者として、投票に参加して国や地方の政治に関わっていくことになる。そのため、中学生を未来の有権者として、政治的価値判断ができるように育成していくことも、また急務である。

こうした際に課題となってくるのが、グローバルとローカルの乖離である。社会科の授業では、「地球温暖化」、「人口爆発」、「難民問題」など、世界全体で考えていかなければならないグローバルな課題を取り扱う単元も多い。同時に、生徒たちは「平和主義」、「裁判員制度」、「地方自治」など、日本や地域といった自分たちの足下のローカルな課

題も取り扱う。すなわち、社会科教師は国際社会におけるグローバルな市民性ととも、日本人、地域住民といったローカルな市民性をも育てていかななくてはならないということになる。しかし、そもそもこうしたグローバルな問題を、きわめてローカルな中学校の教室内で扱うことについて、あるいはローカルな問題をグローバルな視点で扱うことについて、はたして生徒が切実感をもって授業に臨めるのだろうかという疑問が生まれる。こうした乖離をめぐる状況を、岡崎(2012)は「"Think Locally, Act Globally"の有名なスローガンが、現場の教育活動に対して事実上大きな落とし穴となっていたようにも思われる」と評している。では、グローバルとローカルをつなぎ、グローバルシティズンシップを育成するためには、どのようにしたらよいのだろうか。

草原(2014)は、グローバル社会での有効なコミュニケーションツールとして「概念」を挙げている。つまり、「経済的・文化的な背景を異にする人々、常識や価値観を異にする人間」が「概念をつくりながら概念を通して平和的に対話し、関係やシステム、課題を分析し、再構築して」いくことが、グローバル社会の特質であると述べている。そのため、グローバルシティズンシップを育てるためには、身近な他者ではなく、共通言語を持たない相手や、主義主張の異なる相手、あるいは、異なる価値観を持つ相手との相互理解が必須であるといえよう。相手がどのような考えをもっていいのか、また、それを否定するのではなく、自らの考えとの相違点はどこなのか、互いに妥協しあえる部

* 広島大学大学院教育学研究科

分はあるのかなどを探っていくことが必要になる。むしろ、クラスを構成する個人個人は、そこまで大きな背景の違いをもっているわけではないが、大なり小なり異なる価値観をもち、空間を共有していることには違いがない。こうした異なる価値観をもつ生徒同士が授業の中で共通の概念を作り上げていく過程にこそ、グローバルシティズンシップが育つメカニズムがある。こうした概念を追求するプロセスを授業に仕組み、協働的問題解決を行うことが、グローバルシティズンシップを育成するためのトレーニングになるのではないかと考えた。そのため、個々の生徒には、自他の価値観を比較検討しながら、その価値判断をしていくことが求められる。

II. 研究の経緯

広島大学附属東雲小学校・中学校では、平成27年度より、「グローバル時代をきりひらく資質・能力を培う教育の創造」を研究主題として研究を進めている。これを受けて、小・中学校社会科では、グローバル時代をきりひらく資質・能力を、社会科で育む公民的資質や学力を踏まえて検討することとした。また、授業展開の中に、協働的問題解決の場面を設定していくこととした。

また、平成23年度より4年間にわたって「小・中学校9年間の学びのつながる授業づくりのあり方」の研究を、各教科で推進してきた。社会科においては7年間のつながりということになるが、これまでの小中連携の研究の中で、社会科では教育内容の論理に子どもの心理を結びつけた授業の開発を継続して行ってきた。どんな教材も、生徒の興味や学ぶ意欲につながらなければ意味をなさない。そのため、教材には単に空間的にグローバルというだけの国際社会問題にこだわるのではなく、たとえローカルであっても、生徒が関心をもって、互いに概念の探究をめざすことのできるものを選択することとした。

以上のことから、本研究では、グローバルシティズンシップの育成を期した、概念探究のための価値判断をする授業開発を行っていく。

III. 研究の目的と方法

本研究の目的は、グローバルシティズンシップを育む授業を開発することである。授業では、生徒に当事者性をもたせるため、ロールプレイの要素を取り入れ、

知識構成型ジグソーの手法を用いて行う。生徒には地域住民としての役割を生徒に担当させ、生徒同士に政策判断を異なる価値観をもつ複数の人間の間での合意形成を疑似体験させる。また、活動の後、自らの政策判断を振り返らせ、ワークシートの設問に対する考えから、生徒のもつ特定の概念についての価値判断にどのような変化が起こったかを分析し、以下の表1にもとづき評価する。

表1 価値判断に対する評価

| | |
|---|--|
| A | 他者の経験と自己の経験から抽出された価値観を示し、自己の判断を正当化している |
| B | 自己の経験から抽出された価値観を示した上で、自分の判断を正当化している |
| C | 自己の経験から抽出された価値観を示さず、自分の判断を正当化できていない |

IV. 実践の概略

1 生徒の実態

研究に先立って、研究対象の生徒（広島大学附属東雲中学校第3学年80名）に対してアンケート調査を行った。アンケートは、小林(2015)の行ったISSP国際比較調査「市民意識」（以下、市民アンケートとする）を参考にした。その結果、本校の生徒には以下のような三つの傾向が見られた。

まず、生徒の生活満足度が比較的高いという点である。市民アンケートにおいては、今の生活に満足しているか、という問いに対して「満足している」、「どちらかといえば満足している」という肯定的評価は65.8%だったのに対し、本校生徒は93.5%に及ぶ。次に、生徒が他者の価値観を尊重しようとする思いが比較的強いことである。市民アンケートでは「意見の違う人たちの考えを理解しようとする事」に対して「非常に重要である」、「重要である」と答えたのは42.0%だったのに対して、生徒の回答は81.9%にのぼる。最後に、生徒は自らの政治的知識に自信をもっていないという点である。市民アンケートでは「日本が直面している重要な政治課題を私はかなりよく理解していると

思う」という問いに対して、「どちらかといえばそうは思わない」、「そう思わない」と回答したのは30.2%であるのに対して、生徒の回答では63.7%である。

以上のことから、対象生徒は日々の生活に対して大きな課題を感じておらず、相手を理解しようとする意欲はあるが、政治的知識については自信をもつことができていると考えた。

2 教材について

本研究では、地方自治の単元で「地方創生」を扱う。少子高齢化が進む現代の日本では、人口の偏在にともなう一極集中が進んでいる。こうした状況にある中で、過去、数多くの町おこしや村おこしといった地域振興が行われてきた。しかしながら、その多くは必ずしも成功しているとは言いがたいものも多く、さらに現在でも各地で試行錯誤が続けられている。そもそも、地域おこしの出口はさまざまであり、地域がどうなることを目指しているのかという思いを地域住民が共有していないとうまくいかない場合が多いという。たとえば、人口が増加すればいいのか、維持できればいいのか、減少が緩やかであればいいのか、あるいは訪れる人が増えて活気が出るだけでもいいのか。こうした中で提唱されているのが、「地方創生」の考え方である。これまでの地域おこしが人口の増加や維持を目的としていたのに対して、地方創生は地域資源を活かした自

律的で持続的な取り組みであるとされる。よりよい地域をつくるために必要なことは、地域にくらす人々の価値観によって大きく異なる。そこで、地方創生の出口をめぐる議論の中に、地方自治とは何かという概念をめぐる思いの違いが表面化すると考えた。よりよい地域をつくるための合議によってその価値観をぶつけあい、地方自治という概念そのものを再構成していく過程を授業に取り入れることとした。

3 実際の授業

実践授業は地方自治の単元のまとめとして行う。生徒の実態から、協働的問題解決学習を図るために、以下のように工夫を行った。まず、政治をめぐる議論を生徒自身の見識で行うことについて、自信のなさからためられるだろうという予想と、小集団での意見が似通ったものになるかもしれないという可能性から、生徒一人ひとりに抽選でキャラクター設定を割り振った。さらに、それぞれの役割を演じつつ、さまざまな価値観に触れるため、議論に必要なデータを、地域内の施設でヒアリングするという設定で、知識構成型ジグソーのエキスパート活動を行った。また、この活動には、タブレットを使ってそれぞれがパワーポイントで展開される関係者との会話をもとに分析させた。(詳細は以下の表2を参照)

表2 実践授業「 みんなと一緒に考えよう、みんなのために考えよう ―東雲村を救え！2018― 」

| 学習活動と内容 | 指導上の留意点 (◆評価) |
|--|--|
| 1. 導入 (10分) <input type="checkbox"/> 前時の振り返り 前の時間に何を勉強したでしょう。 ・地方創生 地方の問題をいっぺんに解決する方法ってないかな。 ・無理! ・難しい <input type="checkbox"/> 課題認識 今日学習する東雲村が置かれている状況を理解しましょう。 2. 展開 (35分) | ○最近のニュースなどを話題に出して、前時の学習内容と関連づける。 ○現実にはすべての課題を同時に解決するのは時間や費用の面で難しいと説明する。 ○東雲村の状況を、パワーポイントと資料を利用し、データをもとに客観的に示す。 |
| よりよい地域を残していくために、何が必要だろう | |
| <input type="checkbox"/> 役割分担 4人班をつくって、それぞれの班でくじを引いて、 | ○地主の子、診療所の医師の子、役場の職員の子、 |

当たった役割をしてもらいます。

□ビジョンの確定

4人で話し合っ、以下の空欄に入る言葉を考えよう。

「東雲村を〇〇な村にする」

□関係者会議

それぞれの班で分担を決め、4つの会場でヒアリングを行いましよう。

□東雲村諮問会議

担当者が帰ってきたら、それぞれの会議の内容を交流して、何を決めなければならないか確認しましよう。

- ・周辺の町村と合併するか、しないか
- ・特産品に補助金を出すか、出さないか
- ・バス代の半額補助をするか、しないか
- ・介護施設を建設するか、しないか

□交流

それぞれの班が、よりよい東雲村をめざして、どのような政策を行うことになりましたか、村長は村の政策を発表してください。

- ・私たちは、東雲村を伝統を大切にしよう村にしようと思、このように政策を選択しました、なぜなら...
- ・私たちは、東雲村を新しい農業で発展する村にしようと思、このように政策を選択しました、なぜなら...

3. まとめ (5分)

□交流

ワークシートに、今日の東雲村をめぐる議論の振り返りとして、よりよい地域を残していくために何が必要と考えたかを記入させる。

専業農家の子の4役を割り振る。

○生徒は、自分の役割を確認する。

○ここで考えたビジョンをもとに、それぞれの担当者が持ち寄る課題を考えることを意識させる。

○役割毎に関係する集会に出席(ジグソー)、それぞれの集会では、自分の立場で村の将来をどのように考えるかを協議する。

○関係者会議が終了次第、すばやく4人班の隊形に戻るように指示し、どのような政策を打ち出すか話し合わせる。

○それぞれが持ち帰った内容を持ち寄り、最終的にどのような政策選択を行うか、その結果がどのように「よりよい東雲村」につながるかを考える。

○机間指導では、ビジョンにもとづいた政策になっているかをチェックさせながら、考えるようにながす。

○それぞれの班が、「東雲村を〇〇な村にする」というビジョンとともに、どのような政策決定を行ったか、どうしてそのような決定に至ったかを発表する。

○残りの授業時間によって、発表の形を工夫する。

◆よりよい地域像をイメージした政策判断ができているか。(発表・ワークシート)

【社会的な思考・判断・表現】

V. 結果と考察

ワークシートの「よりよい地域を残していくために、何が大切だと考えるか」という設問をループリックにもとづき評価した結果が表3である。A・B評価を合わせると、全体の9割弱であり、ほとんどの生徒が地方自治を構成する概念に対して、何らかの形で価値判断を行っている様子が見られた。

表3 概念形成の評価結果

n = 74 (92.5%)

| A | B | C |
|------------|------------|-----------|
| 23 (31.0%) | 42 (56.7%) | 9 (12.1%) |

A評価の生徒は全体の3割程度である。A評価生徒の例(表4)には、「住民の意見を最大限まで理解」としつつも、「実現可能な活動(政策)をする」としている。当初、この生徒は合併を推進することで財政規律を整え、団体自治の視点を重視していたが、協議を経て住民自治の視点も考慮して、価値判断を行うことができています。この生徒のように、異なる価値観が交流した結果、価値観が再構成された様子が、A評価の生徒いずれにも見られる。また、今回の授業では政策選択を行う形で行われたが、この段階であれば、データをもとに政策立案を行う形での授業実践も可能であり、多様な価値観をもとに概念を再構築することができると思う。

金を増やすべきだと思う。それから、設備を整えていかないといけない。

1割程度のC評価の生徒については、今回のケースのイメージから、具体策そのものを重要な点としてあげることにとどまっており、自らの価値観を示しているとは言えない。この段階の生徒には、B評価の生徒と同じように、別の設定で考えさせることが有効ではないだろうか。グループごとに別々の設定を考えさせ、さまざまな解決策を並べた上で、何を大切にしているのかを帰納的に学習することで価値判断させ、概念形成をサポートできるのではと考える。

表4 A評価生徒の例

その地域の状況や、住民の意見を最大限まで理解し、できるだけ多くの人の意見を取り入れつつも、実現可能な活動(政策)をすること。また、周りの地域の良さを生かしつつ、その地域ならではの良さも残す。

表6 C評価生徒の例

若者を呼び込む魅力、便利さ。
その地域の特産品をPRする。
資金が大切、合併すること。

6割程度の生徒はB評価であった。B評価生徒の例には、先ほどのA評価生徒と同じく、「お金がないと何もできない」として、財政規律を重視する姿勢を見せている。これはエキスパート活動でヒアリングを行った内容に大きく依拠している。自らのヒアリング内容をもとに価値観を構成しているものの、グループの他のメンバーが持ち帰った内容を考慮した様子は見られない。こうした生徒に対して、価値観の再構成を促すためには、条件の異なる地域、今回の事例であれば地方都市のドーナツ化による都心部の人口流出などに設定を変え、本授業のケースと比較する中で共通点を見いださせるような学習が考えられる。こうした学習を行うことによって、より多様な価値観を交流することが可能になり、生徒の概念形成を助けることができるのではないだろうか。

VI. おわりに

ロールプレイを取り入れた授業開発によって、自らの思考を深め、価値判断する授業を開発できた。また、異なる価値観をもつ人々が共通の目標に向かって協議する体験をシミュレーションすることで、生徒の価値判断と概念形成に一定の影響があることがわかった。

今後は、さらなる授業改善や単元構成の工夫によって、概念形成を通じてグローバルシティズンシップを育成する授業を開発をしていきたい。

引用・参考文献

- 岡崎裕：グローバルシティズンシップからローカルシティズンシップへー国際理解、まちづくり、特別支援の教育ー、プール学院大学研究紀要第53号、29-43、2012。
- 草原和博：グローバル社会で求められる社会科の学力ー他者とともに概念をつくり、データに即して吟味・活用するー、「学校教育」No1169、22-29、学校教育研究会、2014。
- 小林利行：低下する日本人の政治的・社会的活動意欲ーISSP国際比較調査「市民意識」・日本の結果

表5 B評価生徒の例

とりあえず、お金がないと何もできないから、お

- からー, 放送研究と調査第65巻第1号, 22-41, NHK 放送文化研究所, 2015.
- 迫真也ほか: 判断基準の可視化によって思考を深める 社会科公民的分野の授業開発ーツールミン図とICTを利用した生徒間交流を重視した学習のイノベーションー, 広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育」第46集, 27-33, 2015.
- 全国社会科教育学会: 社会科教育実践ハンドブック, 明治図書, 2011.
- ペニー・エンスリン: グローバルシティズンシップ教育ー世界市民主義 (cosmopolitan) と愛国主義 (patriotic) ー, 「シティズンシップ教育国際会議論文・発表資料集 社会科教育やシティズンシップ教育は道徳や規範をどのように関連させているのか?ー研究方法論と比較研究ー」, 107-122, 英国イングランドをめぐるシティズンシップ教育研究推進プロジェクト, 2014.

The development of lessons for socialstudies to foster global citizenship
-Through learning of local autonomy to value judgments by the use of role-play-

In order to develop global citizenship, both the citizenship which is faced with global issues and the one which tackles our local issues is required. However, the problem is that both of them are very much separated from each other. In order to solve this problem, the authors suppose that learning conceptual-research as a communication tool will contribute to linking those two citizenship. For this reason, we develop lessons for reconstructing values by making value judgments about the concept. In the unit of local authority, we gave lessons about regional revitalization with the use of a virtual village. The students were asked to do a role-playing activity in which they had to discuss and reconcile different values. Judging from their worksheets, we found out that many of the students were able to realize concepts which constitute the local authority.

keywords: education of global citizenship, role-play, value judgments, regional revitalization